新板
繪入

奇傳新話

一

へ伊13
2998
1

門 伊13
號 2398
卷 1

奇傳新話序

駿臺小隱古和子蜉蝣之世塵を避て輪光
常に江海山林に逝し獨行と興を乘て行
興尽て歸る其人々志者也一時興
ふ法を案て奇傳新話と題し書を撰んで五卷とし
卷毎に二章乃奇傳を集め計十章有り
章々皆人間未聽の奇事を清新して
獨樂を便とし去る辛丑の一夕祝融氏の爲
書笥を燒亡し〻新話の清稿亦偏に

爲有感於怪誕之情然而無用之著述
造物者之多事棄之亦惜也予久
して其書も物故すと雖も親戚朋友亭新話の
内勇士節婦類一卷を世に出すこと
堂上乃殊更にて余に紙筆を請ひ乗
高何流行の雜書と人毎古人の名を借りて
今の事跡を寫し勸懲の意を寓する全篇
爾来新話いくばくすべく今茂適絢年場に於て
一老古家の伝とする奇傳新話及び彼此
又同じく漢同紙求に応じ我国の
取乃三国を経て彼此和漢を
とする所彼是通じて其人間と全
相対く六巻を形暫く部類を次第
出版藏と共時あり全同を傳むことを希
江戸東絢雀慶答軒にて志す

天明二年壬寅冬十月

後編

奇傳餘話

近刻

奇傳新話總目錄

巻壹
幸若節操死再嫁細川頼連
巻二
禍善福悪建部軍太爲翠跡
禍悪福善伊沢玄庫顕大功
巻三
游女確言秋山八郎立忠孝

巻四
絶除邪悪貞烈慶女調婚妻
巻五
解二愁苦牛窓貫左入禅定
乞丐智計坂部尤近復父讎
巻六
離魂為形呻医玄司全伉儷
已上

奇傳新話巻之一

幸若貞節死再嫁細川頼連

明主賢臣ありといへども其偶を離れて君天あるを知らず大業をなして事わらず一旦天命のきする所を知らず不測の君臣の物となりて其徳其功あるひ物をなして海内を安撫し万民業を楽し芳名伝不朽なる且男女の伉儷もまたきちりあり情相愛して死生伝はせんと拙子といへども暫時乃蹇あるを愛して忽丹山の別をなして其偶を失し数年をして再相愛して事を成さく偶然と会をあわり是天命の幸を得るあり多くい始めありて終伝遂に君臣其業あんて時を得ず其徳伝わらて事なき古より其類多しなると

わるぐるい大あり 我志所に至りてべべ今は昔とあんね京都
足利殿軍義満公の時よりあるとんとえ弘ちの大乱御静謐よ
りて萬人其德とたゝひね其頃細川武蔵守頼之朝臣将
軍を補佐して世挙手と唱る事実よ世人の賢あるよりれ
王氏族の中に同性兵庫助と云ふ人の次男まさ助頼連と
云者あり初より志選く膂力わつて武術よ練し容貌又
殊よ凛し氣勢烈しきよりとく十七歳よて戦場よ於て敵
方の勇士三騎よ駈合せて竟よ三人を捕分て剣へ薄よも
屑ひべ三つの首を取れれ味方の熱軍大よ驚嘆して自ら
の樊噲と呼あをり頼之も大よ思れるまでも若年よ
してかゝる功とあるり人を賞するより驕慢のひと生じ

わるぐるい武勇と盗賊の雄とある者多くまてたりぐと頼連を
呼て教示ありるふい勝屑の大事強勢とをんとく敵を
捕ふと称せるい匹夫の業あり汝も父い備の司あれい自己
の勇力とあるとを専勢とをべべ人数の座作進退と自由
にして敵の虚實と猟くく其労とを陀勝利と得る道を知ら
ぬ 世度の働も加る所あるとも勝屑の益にもあるべ
唯自己の武勇とあるとのこと人い悪く稱せるとも我い初て
喜べべ己事見苟を改く將のひとする所を学べべ我は
言後事思ひあるべとをくく教訓ありれい頼連案
に相違して心中服せずとをべべる揉梁の戒め慎く領掌し
立帰て父兵庫助に二郎よむるく頼之の教戒を述べ其理

あるがごとくにく其人次子なり其任戰鬪の士なり敢闘の働
とゆくく任とするべき事なるに執事の論我任よりまさる代以
て戒と加へのみ其心を不快とするとて遂べるに無庫ゆ大よ
つて執事大天下の賢人なり汝が將笑ある代暗く正直の勇
に止りん事を惜しこと將業を成くゆとして学び得よ後来を
りひ為べしとの確言ようく味ひて其意の怒膳と感佩
さべしと諫るふに六郎主接して部屋よりく其夜主をさし
初て悟代得く執事の教實よ大なるの志を所あり今冊所
にあつく仏無ゆとも中く師と仰くべき者もなし天下の廣
し黄石恩谷ゆとも代良師なんであるべき武者修行し
其真代得ぬべしと排暁よりの陶くと書置して竟よ逐電

せり翌日父兄其書翰を見くく大よ驚き四方に人を走らして
六郎を求れども其行方をもつべき見兆なく頼之よ新くられを
執事完尓として世子必勝屋の機密よ達をべしと都て
喜色ありられど無庫ゆも是を軽くよ代安んじぬさても
六郎頼連い是よりもて遅く様早くとなくとをいとぎ
先九州よりつく偏歴ゆ代事半歳修して其師代得
ど更より中國を経ぬべしと長門國よりつり山林幽谷のさひ
ゆく往行し一日丹後より丹波の山路よかりる所よ山間より
究竟の山賊二人出く前後より六郎を立ちて旅人をゆく
衣代脇刀と渡して生命をもてゆくべしとあまを一命一刀のもと
矢んと問ちく立ちよりて六郎かくとけつく自修の旅客

と思ひたゞとんせを思ひるゞもうるわれ我衣類を得んと欲
をるうちよ汝等ゞ首怒よ多ゞ早くさんと牧あるを行
と女人ゝ〻く大膳の旅人号悟せよと系後より左力と接て
きりかるゞ六ゝ郎蝶のおとくたくゝ佐ゝよ二人の左力ゝ
おとゝ甚強く女人ゝ投倒し勝よ左ゝく動うせず己等
最前の我詞ありひとゝゝ一力に切殺んと思ども剣法そ下
ありゝけるゞ盗賊よあゝ只女人のむよりゝ
ゝぎゝゝゝゝ棟梁あゝく其下知よ従く働くあや一力一棟
梁あゝ其人の性名ゝ来をかゝゝ我其名ゝ関て仇をる
去よあゝ必其人の高人よそゝるゝあんと思て一度是に
逢んと願ゝゝゝゝ同るに二盗大よ感で君の武芸勇

力備ゝに日本無双あり某等ゞ頼む不の棟梁ハ世山奥よ住
居ゝて無都ゝ郡ゝ郡ゝ智勇兼備の名士あゝ去ゝ〻ゝ邪悪
と禁ゝて正ゝゝゝゝゝゝ君若対面とのゝゝゝゝゝ我く一取次ゝ
ゝゝゝゝゝ兼ゝ九ゝゝゝゝ吾部ゝ郡ゝ軍所乱を
さけて中国の山中にく賊首ゝかゝれ居るゝゝと関おゝびゝれ
で心暗よ従ゝびゝゝく引ゝ汝等實よ我ゝて棟梁に逢
めば大幸ゝり使ひゝゝべゝゝよ二盗限ゝく従んで山路案内
のゝゝゝゝゝゝ時五六人の勇士ゝ連ゝ二人の棟梁山を
ゝり来ゝゝれゝ二盗ゝびさゝて我棟梁ゝ世ゝ来れゝゝ
走ゝゝく私語ゝに棟梁威儀ゝ正ゝて六郎をむく女人乃
ゝゝゝ遠ゝにゝく貴客其ゝ對面ゝゝ度ゝ身ゝ貴の

某勇士の所望にあづかる武門の誉れ見ぐるしくとも
私宅へ御供せんとのべられ其人物堂々たる英雄
なりしかば立帰り大よ抜んで今日もうらびあ士と闘ふ年の上
和諍して棟梁の見参に入ぐると相約して貴家へ志に所
天幕あるか世不にて貴顔をつて方寸に貴宅へ来候
して姓名を聞き相のぶると慇懃に申られば棟梁も頼
連ぐ相貌凡なるず且詔の慎めふ安心して出まより同行
して一里ばかり山路をとろ一つの大度あり一人立り入る
ば門扉を開くあ人た有よ平伏せり伴ひ入るに廣大は
て玄関に英士七八人出むかへ礼儀厳有
兵部少輔頼連と伴ひ座敷へあがり同じく通りて大なる

書院あり荘厳目をおどろかせり既に茶座して酒盃を出し
あ人相對して頼連申るは其い細門武禅門の氏族山部
頼連と申者なりと次第を語り兵道の機微を学び得んと
かくのごとく武者修行して九州に遍歴して一異人に遇せ
ぞかのるか主翁の武徳ある事を聞得く心せまつく中国
にてもうり今日山路かくまの士と闘論に及び尊名に
聞く志願の届しと喜び今かく恩人恩言を受く主翁
其ぐ丹誠をこらして兵道の機密伝授帝のこと懇志面目
溢まく再拝して述られぐ兵部少輔模まと打て貴宅
妙身にして武義に達し勇力群に秀て特兵道を学
び得んと其志義稚正成と名つくべ其不肖なりと

いづれも其志あつく性弁此山中に後翁と云ふ隠士あつて其
ふ考さだつく兵道を講ずび漸く勝負の圖を知り得ふがで
ず一俊翁没して此の山中にあつく多くの盗賊と指揮し
て數々小迫合に其圖を失ひて何とぞ明聖の主と得く天下
兼平の謀にあづらんと欲そ今や年たてれ知命に及ひたと
に南府明君賢臣出く稍ち乗平の姿とあつて故よ其初念を
解て此山中に杖をそんとす貴客の請よ不精誠著しれば
我一言の辞謝とるさだ一歳世に沛苗あつば家よ秘とふ
不の機微悉くにさんとはいつもんと言語正しく深切よ差れ
を頼連ちさつく之辞し今日より師弟とあれいつもとも
其相應のほくむる和と命ぜられよ身粉と砕て奉仕せんと

いよ兵部ち命感嘆して男士ありくかくのごと英雄示ふ
ぞ共思ひて家あつく叔姪の誓ひとなりて去らつく山に足
と止りぬ抑吾幼ち命ち居宅は大諸侯のごく強更要害よ
りつく志ありと堅固よ有りと雖ふ更毎年金剛の城郭なり頼
連も居あつて吾幼ち妻よ對面ちる年數四年ありて
盛の花いろはぬれども風姿峯上雪の人のごく初儀正し
き事古乃賢婦の名ひにも比ちべし婢の数ちべく義羅に
して賤ちべ礼式ち厳ありられば頼連はちく心服して彼も
学に怠らべ婢女多く頼連ぞ義男兒よ心ひくさはく
勉書勉言ちりて便らんとすれども山の鄙卿も心とうどち
さべ礼ちりてちまた過ちるふ人よ嘗く卿くせこねとの

ゆゑに信夫とゝくふ女温和よして容顔美麗なるゆゑ
頼連と互暴して寄りて朝夕筆墨と通ぜんとすれども
あぐくんを用ひく奉仕し時として眼をとゝくゝ情なくて
頼連亦彼が容姿の婉嫋なるに初めよりふかく信夫が
深情より鉄心硬よりなぐされくゝとゝくゝ相馬して其心底を結る
に道理を弁へ分りゝく相行よの心を固くれを頼連も大
よ懶熟しく無為が書も稍さとゝくゝ似合の縁なれを
夫よ請ゝく信夫とゝくく頼連の書とゝんべーと思ひれは邪
て心をとゝくく通路をとゝちびさくれを無為して実よ
子載の奇偶ありとれよゝくゝ山郎も猶且無道よ日夜力
をゝくゝ一をゝくゝ二を初るの聰敏なれを無為も誠心以

布くく子のごくくこれを解き月初日ゝくく一歳よりゝ
遂よ其大乗と徹し多ゝり志願ゝに達とれを邪魔かくこれ
生ゝを山中の農乃中に海道次郎とゝよ邪智暴逆の西者あり
元来兵部左卿が侍女のゝ子にく肉縁ゆれば自然と山中無為
が嗣子のごくくに号敬ゝて次郎も山塞の後主に祇ゝと
心よ定ゝく無為夫婦よ編ひ行よとゝくども夫婦ともにゝれゝ
得の邪暴に情ゝく常に戒め恵ゝり世海道次郎頼連ゝ為
叔姪の恩ゝと知ゝく兵学と紙ゝ夫婦も子のごくくにゝれゝ
頼連が武義勇力山中に獨歩のゝれをゝくゝ嫉妬の情ゝく
ふゝく憤りと含ゝ侵農の中祇意とひゝれ邪悪の為を謀ゝ
中語ゝひて不詮頼連とゝくゝ打敷んと謀りゝくゝ

彼ら武藝勇威をたぐりてみぐるに成下さん甚時とはち
居らう嬖女の内よ宮路とゝる女元来京都の産にて玉極
の嬌婦よて眉目も示麗く古印にひさてゝに意慕して
種々ひとりゝれども頼連ゝく辞一ゝ文雑方ゝく欲ひゝ
海道ゝ偽ふよ後ひたあよ相馬ゝく乗ひね海道次
郎婦人よかくのおゝく意ゝゝ文路兼て
き宝を得ゝゝ乞地して若を麗ゝ限ゝかの文路兼て
頼連と恨ゝ情ゝけまば海乃ゝ客よ頼連信まゝ流ゝね奚
ゝ成迷ゝく主人まぬも頼連信まと山中の後主ゝゝとゝ乃ん
あゝゝさ海ゝ誘ゝ気を海道大よ情ゝと記ゝ汝ゝでかゝの
おゝ乞客ゝと我よ走ゝする者ゝ好ゝ一郷あり世山中乃ゝ

客毋の様ゝ甚厳ゝ頼連信まゝ客よ問と例ゝ山中に新ゝ
衆人のゆゝゝ恥とゝゝ頼連世山中に出ゝ来ゝ乃ゝを
づゝ我志も違ゝ乃ゝ我山主ゝゝ必汝ゝ乃ゝ書ゝゝさん
や甚多殷を示ゝあゝ世ゝ乃ゝ信まい早くも山謀と演ゝ乃ゝく
客に無礼ゝ書よ中ゝゝかい海道次郎文路ゝ陰謀ゝくのおゝく
と委細よ迷ゝくゝゝゝ頼連と意慕して禁制とゝゝてゝ
て客毋ゝ甚罪過まゝゝ未と記ゝゝゝい妾ゝく古印よ聊も
過ゝゝ海道ゝ謀計を行ゝ
おのゝゝとゝやゝかんとゝゝゝゝ乃ゝ妾一人と罷ゝのゝば山中
を感ゝ甚ゝ乃成拾めて帰ゝゝ書も甚志
ゝゝ邪人の謀よ落ゝゝゝたゝゝゝて時節と待べゝゝ

ありがたく伝えも主恩の厚大なるに感ぜざるべく叩伏あがみたるまでなりにく退られて書もあれども便なきにて無為なるに
ありのまに毎日なれど無部笑く時節あり頼連と罷
て山中に知られぬ彼が身分障り業いすでに成就せり其
侵至るべば海乃が彼と殺んと諸の事多時あり其雖とまぬら
きつもて信まいあるとまり罷して退さらべ自然と夫婦なるべ
て竟よい身と立功と天下にあらんべーと都てあんこの結れ
で妻もんとをもんでぬい部頼連い山を夫婦の厚意と信
まより安得く感謝よくんだとれよりこざと志ぐく伝え
を舎しるるに一日困陳ありて二人快く物語りあると夫婦
寄よ海道次郎にたーせられで海乃業とひきみく多に

其ごーさんあり頼連と呼ばあ人動揺て夜叉ととり
にくろの五四人立入りて山中伝えあ人の寄毎日届さり
山中の大樹と中ある母管学ん培せよと呼ばれで兵法部
もちろん揺く立出大よ怒く頼連と引あてさんぐに打
擲しそんて道と学ぶ出万廃てん一器にむふ世力と込く
通しーぐられよ毎ど知りがきと志る人心の妙あり母兵学と
そんでまぐ学にいそんだ好の時よひられて山中の大樹
と舞り寸今将に不氏志ぐんだ母且言訳ありやとよ頼連ひ
き依く一言の答ー無部母そくいんく奴不辞の武芸
吾号の勇力あり山中にまるまれよ敵せん我ちさあると
その分海道次郎と毎人して頼連と引ちく立矢書に命ド

て信夫と押問答くるせ知らず同盗ども彼らり行うんと
すると書女別して山を海辺と行と見い家にうひ知とこれ
ととゞめて動揺と彼居らり事何はりもそぎて兵部卿
只一人立うりて古郎軍兵共貧困さして例の例にもづめ
さり海辺法命い六郎に交語と家毎逢接とあく見さん分
にあがりあるらや其場らり逐電せり山中好多の根とうつ
てむ義家らり信夫い事よ返知とべーや即刻に逃放せり
交語いせんぎありとて止め家ね山中孫の志向り立知事郎が
智分はいに器に信夫い頼連が沈めにらりしと聞くまと
も生涯ふ心ふく狂人のおとくくらり生く彼測よつり水
底に昭むにるるにて貧巻人人見れば天よ呼び地よ泣く

君子万人よすでくく乃武あるつく賊一人婦人のために殺死
あるに命数とゝくとも是ゝ家毒が罪なり死死ゝくゝづる
其罪を由り彼ら幸あるんと躍り入んとする死かゝゝ
の源義ゝづれとあて暫しほれよとゝよ妻ゝ神すでよ
みづれく事き事と就よたゝに一刹も早く水底に入ゝに
ゝ死あが知とゝよの義経とゞめて師匠い伝夫ゝにあゝに
や細川六郎頼連反出月に向ゝゝせよとゝく一通をたのゝく
立のれゝと其書翰とゝ人をゝに相違ゝき夫の多知が
きゝに心ゝくひゝ見んれで我無学成就して海道治郎
が嫉妬と奮ひよ出月と生命の不をゝ人刹山中の法と号
て貧巻ゝゝと偽りて山不よ来り海辺をすまきにて

和い四國の方へいそぎ行かりかるべきぞ汝が水死せん事を
さとりて源義経とたのみてゆく一函を渡すに何よそ四國にて
づゝ書るべしと書ありしかれば信夫い義幻のごとくその生死
つゞまりてもうけがたかれども夫の恵を書給ふ不可思議なる
時よのぞんで三つ義の砕金數畳と給りしい旅用の為なる
だし夫の生命を全ふせるも秋角逐ゆるもあるとて主義夫
婦の恩恵ありと山中に向くて三拝し源義に一礼して砕金
一畳とおりて恩と謝し四國へ渡と宿に設を宮に出義
信夫を探よ渡とおもへ使ひして秋屋よ春ひ垂仏紙御に入
堺の源師四國へ渡海の序ありてこれを教えて源義の知音
の方へ書通と渡め給へにかの抱と托してひ源紀よ打給り

て潜幻ゆくるかに夫よ不測の風雲ありて神妙なる業御に
一片の細雲幸のごとくたゆくと見へるが八方に雲れ
ぬり大風須臾よ発して大海晴夜のごとく一葉の源船天よ
のぶり地下に入く源ひ紀よ一国の波よ沸られく孫方なく
かり四方なる源義い濱名よ立く大よ歎息し天を仰ぎ
くのごとく義人の如き節操豈天のたすけなる不可ずや
風波伝者よして夫よ信ず者と矣ゆや幸命なるかなと雀
い海上と立居さらしが是非なく秋屋よりてねさらるべし
細川六郎頼連い兵部卿節が禁にく山中の刑よ行られて其
身と遁れ兵学成就して紀神明朗とおりられども只信夫
ゆ紀上ひたかり快くとして楽ざりしがとり急ひく阿波

國に着し、ひそかに人を高ようして紙筆の用意をなさ
熟練をよんで陶り来たり、何ぞ父の不審を解さんや今
と希はれども、父も大よ喜びくさんとく父よ頼新ゐれば
無庫ゆも、存を以て、詳しがく武士禅門を訪京郭よ
と陶山あるを、紙を乞ひて、これを何ぞ頼之かざりあく喜び
めひ秘、急成就して氏族より軍師を得ることを嘉られ
ぞ早く招きさせて對面あり其席まで軍法あるに戦法
号令座賓の圖皆その真に及ぶ論流々ぐ
其活理攻然られば禅門甚歓喜あってあるに後学ぶて
るべし今や妙が識器海内をもって禅らんと数を引出物
あつく退出の父母に對面して涙を流して孝の業を

謝し、安に執事の責服を得く多くの賜あり、ものと言ふに
父母いたよ喜び地に伏んで行末たのもしく思ひ、其身智
頃、左伯國の山中に將軍を集つと宣ふ強賊あり其身智
勇兵を多人得の盗四五百人國中に横行して暴を行ふ城主
邪司これを制する事あらず頼之新たに掃の盗賊
ひくぶ〳〵禅門氏族長をあつめて辞議あるに伯
容易のまにあらずと論評まくありて神速の手段より
らぐれば、ふ頼連をみ出く我は三百人の士卒を率ひ武
頭と撰ぶて、人命ひらぐ不日に彼賊を捕へんと
に父兵庫ゆ多く数度の場を踏ひ敵将頭を手ひ容
易の敵よりあらずとて、伯の人数をとりく

捕（まとらんとす）るの節（ふし）と述（のべ）たりとて頼連怪（あやしむ）く其仕方（しかた）かめ就（つ）たる業（わざ）を問（とい）ひ糾（ただす）に彼（かれ）と答（こたへ）ぐんの堂（どう）の内（うち）よりあり其手（そのて）段（だん）を設（もうけ）て一人も逃（のがる）ん者（もの）なしと満座（まんざ）各（おのおの）やあ（ああ）て頼之（よりゆき）朝臣（あそん）打笑（うちわらひ）て常（つね）の人（ひと）にて非常（ひじやう）の事（こと）を行（おこなふ）教連（のりつら）なり必（かなら）ず不（ふ）ありきらめて速（すみやか）に功（こう）を賞（しやう）ぜん武頭（ぶとう）二人（ふたり）と命（めい）じ三百人（さんびやくにん）の精兵（せいへい）を指（さし）つかはして教連（のりつら）を捕（とらへ）て打（うち）ぬきの上（うへ）に伏（ふす）て同（おなじ）く国中（こくちう）世賊（せいぞく）と笑（わらひ）て中（なか）に伝（つたへ）て久（ひさ）しく彼（かれ）よりも逃（のがれ）ざるべく切（きり）て教連（のりつら）を同（おなじ）く世（よ）に知（しる）べき国中（こくちう）の行（ぎやう）き方（かた）を辞（じ）して武頭（ぶとう）を招（まね）て我（われ）一人

の武頭（ぶとう）に百人（ひやくにん）を率（ひきて）て山中（さんちう）に入（いり）て百人（ひやくにん）を山下（さんか）に伏（ふす）て我（われ）一人賊（ぞく）の毛（もう）人（じん）我（われ）賊（ぞく）首（しゅ）と使（つかひ）て山（やま）を分（わけ）て捜（さがす）べし早速（はやく）山寨（さんさい）を押（おさへ）て焼（やき）拂（はらふ）べし残（のこり）三百人（さんびやくにん）を二（ふた）つに別（わかち）て武頭（ぶとう）一隊（いたい）を指揮（さしき）して十三町（じうさんちやう）の間（あいだ）の樹（き）を右（みぎ）に依（よ）て笛（ふえ）の音（おと）を聞（きく）べしと辞義（じぎ）して自百人（じひやくにん）と倍（ばい）く号令（ごうれい）を示（しめす）べし静（しづ）かに向（むかひ）て百人（ひやくにん）を分（わけ）て麓（ふもと）より山寨（さんさい）に入（いり）て山下（さんか）に埋伏（まいふく）すべしといひ渡（わたし）て一人（いちにん）猟師（りやうし）の法（ほう）にて山寨（さんさい）に入（いり）て搦門（からめもん）よりて入（いり）て某（なにがし）丹波国（たんばこく）の名（なを）伝（つたへ）て某（なにがし）の男（おとこ）にて来（きたり）しと云（いふ）て某（なにがし）丹波国（たんばこく）の名（なを）偽（いつわ）て先軍（さきいくさ）たりと山（やま）に対面（たいめん）して兵部（ひやうぶ）を問（とい）

意を新にせんと差くなれば五つの紙屋に恭敬をなす不其
人の氏族疎略なるべきと門内の座布に請じ
設くべき事なるに次第と追くて将軍を表向届けて一人来
りのこゝろ言語取捌き実よ我堂の人なり對面なれ
ば請ひ入れとよ既に盜人案内して玄関
より書院へ請じ其要請の結構のごとく頭巾盜司共
入うり接待して珍味の菓子酒肴をとりくてをてなるに
暫くあつて将軍を表綿浦と身に帯る大力を横さ人
て教連よむうつくしんごとくさらり身の丈六尺余にて眼のひ
うり抱き乱髪にた右の頬無逆すれて恰も悪鬼羅刹
のごとく教連恐で押て推参のおさんちくの舎面に入ひ

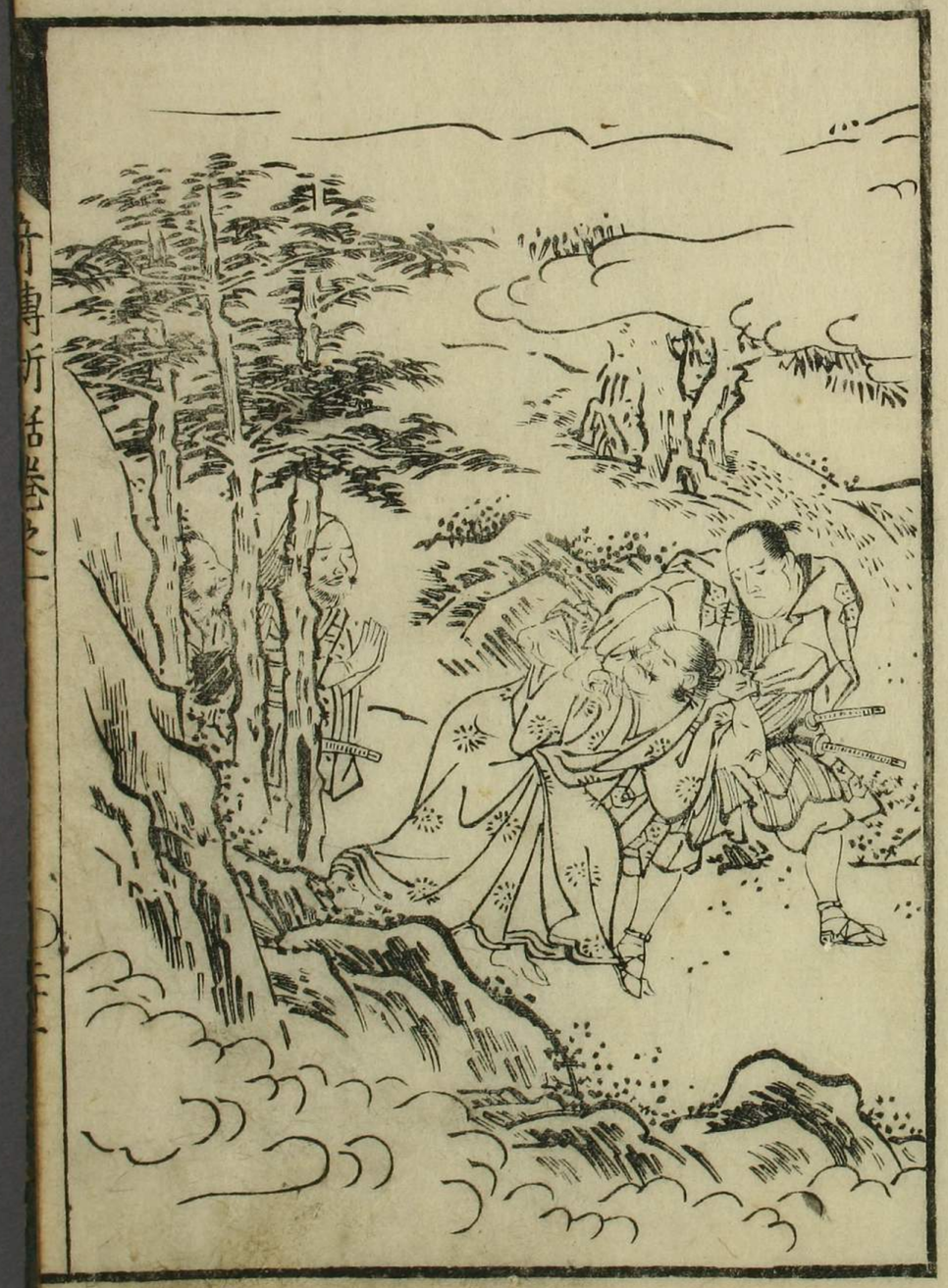
とつよたつ舎釈して不附の客来よ對面せざるい我
堂の常先を厳右和の事りおりきれども無礼なる所辰い
我堂の賢忠義の軍師にて家人を常するおり其
人の氏族と義り礼の神をいとらべに同よかるおりと
言くする骨柄誠よ一山の主領と見へくり教連をく近
我堂和右所の門前とおつて軍道と舎たるの面人只に
同にからんよ彼が氏族と名常たるい偽り誠に家紋将
軍の命によつく細川武蔵守教之先辰よ對面して身べ
きを細あるによつて使ひ来くしとの義にく同氏宮部
頼連と手去あり有を同伴いてしべ一不よ使ひ初
うんとつめ寄さるに勇気満面まあるまさにの左来

遊興して執事の命令怪しく端に早ね礼服ととのへて
ゆゝしき出べきとゝのへよ新連大唱一
短して盗賊と召呼よ伺ぞ礼服ととのへん秋西よ体
ひ行うんとまとりて引ゝるれたつ振ふかさんとする
に鉄と成く縛るがごとく せんさかく引き行よ右まよた
刀と抜りたよ引立て玄蕃とやり門く出るに大勢の
盗賊おきれてゝ手向の者一人もなく塞外へ引連行よ
塞中ひにめて盗司三人身と固て小盗三三百と引率して
後よりさゝく追うけり新連は思ひのまに任せ来ること
捕にて山をとゝまれて十町あまりにして相馬の笛と成
とた追の武臣百人と引ゝく押出し寄よて左右と郷く

却人数おかとんで連行に頼連殿してちづうる退く
盗賊世待ぬ人ゝく急よ寄ひとゝんと駆寄ると一町
ぐらりに引よせて相馬の笛とひとゝく右の桐の中よ
り時とあげて武臣人数を率して盗賊が後合と駆破るに
新連一刻呼んで大力と成く切立るに其勢風を生じて
あらる者と薙倒しゆゝく間よ北郎人殺傷それ盗
賊屋ひとゝれて八方に逃散り其間よ山下に陽を
居る伏兵起りたゝく一同よ山寨乱入し火と放て
かゝるより切立く女房ばかりて盗賊一人もあまた
切伏り山寨に一時よ焼亡して猛焔天よ焔りね頼連は
十分よ切とゆゝて人数とゆゝて山とゝまる不に又兵

庫仗兵三部五百騎を率して梅ひ来りて世子を防く
ちよとどろき且喜く将軍左右と数固して陣せり
さんちく細門禪門より所へられて殆感悦あつて智あり
勇あり當意即妙にして軍師の策あつられさりと
功賞として別まこの貴の地を給りて紫庵より列し武臣
下率迫まくに賞賜あつて将軍左右に首を刎くに
他國まで獄門まかけられさり氏族に即が薫功と感賞
しとれよりて國中城難とまねられ四國の人民ことに
語りて他國より淹まり移そぎて禪門教之に即教連を
移して仏身大功よりつく今かく紫庵と妻室かん
をあつぐらに望あつべ我是ならり射ん紫庵にまた

諸ぐべしとあり乃ち即ち高即特ぐ厚き作いろを背さなる
ひきをりかぐ某丹波の山中にあり糟糠の婦あり
貞節にして道ふ所を知ぐ彼が死生を与ひ
放ま婚者の義に与ひ辞し奉るとつよ禪門感
じて仏身に即義の士あり仏身の尋る信まとこる女性
仏身を慕ひ當國に来り海上まて風波の為に破船して
死矣さり丹波の漁義の妻に拘遣まて相遇ある事なり志
を他の女を迎ひるとも何ぞ陳りあんとあり乃ち頼
連とれと笑く神魂身を去る如地して志ちく涙と包
をるかが角志ろ一ひべにて むに不かし今や外よ妻女を
偽ちるとも彼がぞ死志操に又得ぐ志ちく仏事


竹傳折話巻之一

を賞し冥福を祈りて其情念消えし其後より乃ち
子孫のために書を遺んかの命に従ひ尽くすべ
と退出ずと禅門去るべきと押止め難らめる兼て命
じ置る義人を使ひ求めに軍師の意旨を受けしめ
志賀へ行くあるに彼の内より媚び妬して大勢の婦人の見る
するに教連が信実が死体胸中存ずるべく執事伝
を以て我悲歎屠せんとするやたちまち百飛燕千大真あ
るも伝で我眼中に止んと思ふ小教女綺羅を飾
る十八九歳の美人一箇を囲繞して執事の側より坐さ先
たり頼連睛とらべてこれを見るに丹波山中にくるこれ
生ける信実の執事命じて紅粉の粧をなくさせいつよれ

宴賞を撰べ嬉たるあり或は人間の種類よりべ
神霊仏女と恍惚同る頼連一面の喜び一面の驚き甚惑
して黙居り禅門薬のつく世まあつてこの婦
あり去る尼島国(阿帆の時)の鄙海に俄に風荒くなるべ内
に高船漁舟乗り重く傷るべ幾箇とよるべ其内は一艘
の漁舟浪に打上られ掩ひ居る時船底
の毋と突くに舟中より一人の女我船中に落入漁夫の徴
麿に摧散り其女既に死して息絶不便の事に思ひ
さるべいろいろとうんて茶を用ゆるに衝みて息出
時風も静まり難みく帰城せり医薬を用ひ
以て全く癒その動静を尋るに山中兵部左部方

あるくに月と夫婦の結ひとあり入水の説を信て馳行
貴養をとんとく其仔を飛入んとする所一漁夫あり止めき
に月の書翰をとんとくにたゞあきらめ知りて当国にとんん
わとて海難を逃ひろ[illegible]と信りしよりとんとく始て此
身の婦さなるものと知る志うれども賤き女今此月の家さてん
ゆ扶わたるあり結事たなりとんるに女徳をおろりはこと
に諸度の婦と成く恥なるあり且身異進して書とを
あるよりあるとと絨んとめ婚事を進めるるに此月又糟
糠の書堂とおさるふとに成く苦よ絨よる載の奇遇赤
縄をとるとく真実と繋ぎ是ものを著一昂我婦とをして
月代名をして婚事を調ふるとあるとれで信まも遥

ふ退とく頼連と義びを弥して夫婦海山の大恩言語の
及ぶおよあるべと涙流るるの泉のごとく叩頭首して
信まい要よ入り教連い退出せり世後吉辰を撰ま婚
姻あんとく無庫ゆ夫婦兄弟帰も大恩を謝し破鏡再合
て夫婦の喜び知ねなし皆是孰事の恩波の及ぶ不に論
あるかくのごとく栄花と得るも其事無為なる教恩よ
なれで夫婦ひとうに立難く無為夫婦よる方の義恩
と謝しるなよ無為も大よ喜て餐應とにくし別よ暇く
己来交と断く必青同あんぐらべに身い今尚路の友
人国の改事にあづるる人盗賊とちるんぐ天下の大法
とにとそ忠世とあるに我天下に功とをるよむあり只

山中に死体紙衣冠の人よ多ありと恥ぢられば無用の生
命なりとかく戒めて涙を揮て別まとありたり牧連法
師もせんなきかぎりとなりたり彩女婦ら像に西くちの秋よ
佳くく志代遠ちかとかん六郎牧連い豪傑なり道と学
てゆとく其光輝とあらはれ冥なり信まい山中賊主の
家よ人とぬくかくのおとこ負操豊其性の自然なるら
無数を郡ら書の賢なりたちまちくく世おとくら南海ら
ふくく人毎よ語り賞しらるとあり

奇傳新話一之巻終